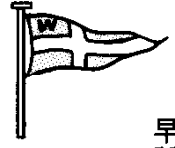


外 号



早稲田ヨットクラブ

号 外

昭和59年 9月 発行
発行者 事務局長 舟岡 正
編集・広報 石田 晋也
会費振込先 松島 弘行
第 勤業銀行 日本橋支店
普通預金 一四四五七二九
口座番号 一四四五七二九
〒162-8580 東京都杉山博保
セブエイトクラブ

青春の記録

『五十年の航跡』

ヨット部史編纂成る！

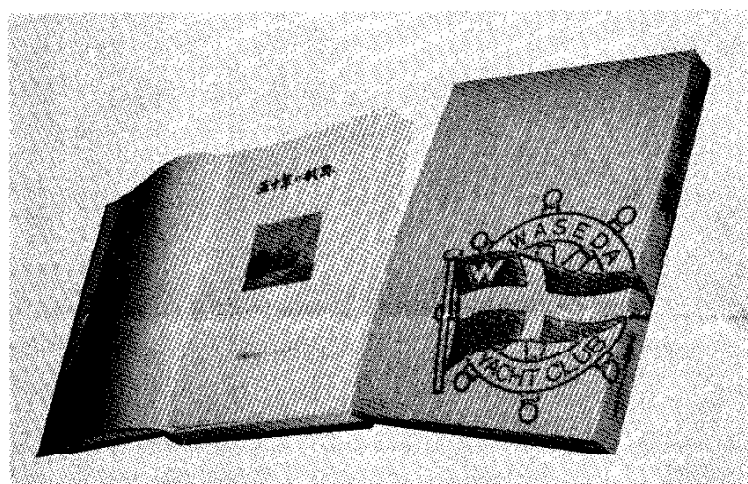
皆さん、大変お待たせしました。私達のヨット部の五十年史が九月初旬、とうとう出来上ります。

小沢信三郎会長の揮毫「五十年の航跡」を表題として、四百二十頁に及ぶ豪華本となりました。

表見開きには、横浜ヨットハーバー周辺地図(昭和四十年頃のものの)、裏見開きには、三浦半島を中心にしたチャートを掲載しました。皆さんの足跡や航跡がたどれると存じます。

私共、編纂委員のセンスも良かったが、製作に当たった大日本印刷の、年史センターの皆さんのセンスも抜群にて、自画自賛ばかりして申し訳けないが、本当に良い本になりました。この号外がお手元にとゞく頃、発送作業が始まります。文字通り、近日中にお手元にとゞきます。

この50年史は、今から六年前、53年の理事会に於いて、出版計画を立てて以来着々その準備を進めて参りました。各年度より一名の理事によ



り構成されている理事会、更に約五年度に一名以上の編纂委員の皆さんの手で、具体的に推進されて参りました。
とに角、良いものを作れ——という皆様からのご要望に、どこまで沿えたかは判りませんが、ゲラ校正の段階で、編纂委員一回、思ったより良くなつたぞ、とほくそ笑んだ次第であります。
子供や、孫たちに、お父さんの、おちいちゃんの、若い時の記録だよ、と語れる様な立派な本にしようという期待に、どうやら沿えそうであります。

当初の計画では58年中に完成の予定でした。ところが、皆さんの熱意が次第に盛り上がり、予想以上の原稿が集まり、その整備に追われたこと。又、次々に具体的な史実が明らかになってきて、部史の度重なる修正を行えたこと。年表・記録の完璧を期したこと、などにより、約一年も完成が遅くなりました。お待たせしたこと、深くおわび申し上げます。

編集は、戦前編、20年代、30年代、40年代、50年代、と大きく分けまして、夫々、(部史)(随想)(写真)をまとめてあります。

学生時代のヨット部生活は、夫々思い出深いものでありま

すが、50年を通して見ますと、こんな事があつたのかと驚く様な事が沢山ありました。編集の仕事をして始めて判った事が次々にあり、感動させられました。

今までに50年史を完成しているのは、九州大学ヨット部と、慶応義塾大学ヨット部です。現在作業を進めているチームもあります。どこにも敗けない良い作品にしようと頑張りました。

早稲田の運動各部も、夫々年史を作っております。夫々、味のあふ作品ですが、私達の「五十年の航跡」は決して他にひけをとりません。皆さんのクラブライフの記録として、子々孫々に誇っていただけのものではありません。

尚、巻末に年度別卒業生名簿を掲載(物故者も含む)しました。皆さんの作品であります。誇りをもって、書架に飾っていただきたく存じます。

(編集委員会)



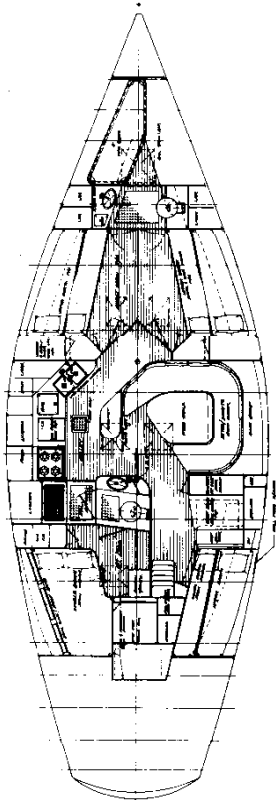
「ご寄付のお願い」

50年史刊行については、大日本印刷株式会社殿にお願いし、費用面で格別の配慮をお願いしておりますが、最終的に七百万円程度になる見込みであります。

又、当クラブの会員数は、名簿上三八〇名であります。

今回の出版に際し、皆様に各弍万円也の臨時のご寄付をお願い致しております。納入率を高め、クラブ財政への圧迫を防止できますよう、皆様のご協力をお願い申し上げます。

本日までにご寄付いただきました方々のご芳名は別表の通りであります。



創部五十周年 記念パーティ

早稲田大学ヨット部、

創部五十周年と『五十年

の航跡』の出版を記念し

まして、次の日程により

大パーティを開催いたし

ます。

ご家族ご同伴の上、賑

やかにお待ちしております。

当日は大学当局の先生

方、ヨット界の先輩諸氏

も多数ご参集願うことにな

っております。

記

日時・ 59年10月27日(土)

午後5時より8時まで

場所・赤坂プリンスホテル

(地下鉄「赤坂見附下車」)

電話 03-3334-1111

青春の記録 五十年の航跡

—早風元気—

(本文260頁より抜粋)

昭和36年 6月 東京湾レース大勝利

このレースは横須賀の米国海軍司令官の招待レースで、レース後司令官主催パーティーをすると云うので前の日から出掛けた。

レースは10時スタート。下馬評では招待側のアメリカ海軍（艇長は現役の中佐・小佐級）が乗る「風早・カザハヤ」と追浜を中心とする地元勢が勝つとの予想。

我々はセオリー通り試合したらとても勝ち目がないので、早風のみフロックコースを引く。

ところが、第3海堡のマークをトップで廻航する時点で宿敵風早は未だ半分も近づいていない。他の15艇もドングリた。小島がアゴがはずれたように笑いだす。同時に手塚、青柳も全員続く。

最終マークを廻って横須賀基地のゴールに到着したときは風早は2周目の第3海堡を廻ったばかり、司令官の少将の顔は苦が虫をつぶしたようだ。ゴールしポンツーンに着くと海軍将校連中から「グッド・レース!!」「グッド・レース!!」と全員握手せめである。

40分遅れて2位の風早ゴール。2時間半のレースが終りパーティーが始まる頃には、司令官の「気嫌も直ったと見え、表彰式にはニコニコとCongratulations!と握手して呉れた。我々はもらった2つのカップを脇にコールドビーフをパクつく。このときの味は20年以上たった今でも忘れられるものではない。



—ピクニックしごき—

(本文337頁より抜粋)

昭和50年

どん底に落ち込んだ早稲田ヨットを浮上させるには何が必要か。もうこれ以上は落ち込む事もなかるうし、過去の栄光はさりと忘れて、今何を成すべきか、藤井(達)主将はじめ、次年度の主将になる予定の冬至(克)、そして大嶋・庄司の新上期達と酒を酌みかわしながら議論。やはり練習量を増やす事と、新人を数多く入部させる事以外に名案はなし。

同じ合宿日程で練習を増やすには、昼食を合宿所でとらず、朝早く海面に出て、夕方まで戻らないのが最良の方法。そこで、弁当持参で出艇せよと命令。何で3月の寒い冬の海で弁当を食べるんだとか、お茶はどうするんだとか、まだウェットスーツも珍しい時で抵抗も有ったが、皆シブシブながら納得してくれた。沈をしたり、あるいは強風の時、アルミの弁当箱の中味は海水漬け。これではかなわないと各自がタッパウエアを持参。これが現在でも続いている弁当持参の終日練習（ピクニックしごき）である。

近年、高校生のヨット熱も高まり、各地にヨット部も出来、インターハイ、国体とも益々盛んに成るにつれ、これらの試合に出場した高校生達が早稲田の門をたたいてはくれないものか。1人でも入部すれば部員不足も解消され、部の発展にもつながると。積極的に声をかけた結果、九州西南学院出身の庄島（インターハイFJ級第2位）が合格、早速入部。これに味をしめ、今年の秋からはヨット部案内会をやろうと心に決めた。

この年昭和50年の早慶定期戦は慶応に僅差で敗れはしたものの、関東インカレ第2位と近年にない好成績。部員にもやれば出来るんだの熱が充満してくる。(続く)

青春の記録 五十年の航跡

—三戸浜小島合宿所— (本文271頁より抜粋)

合宿所は、昭和30年以来、慶応の敷地 350 坪を譲り受けた横浜新山下町にあったが、相模湾への移動以後は放浪生活が続いていた。その後、諸先輩の間では早稲田ヨット部の本拠をどこに置くかが常に大問題であった。或る時期は霞ヶ浦が相当真剣に考えられた。艇の保存に真水の湖が良いことが同志社とのレースの都度痛感させられていただけに強い説得力を持っていた。

たまたま昭和43年、小島孝徳氏から「私の別荘を合宿所に」との申し出があり、この好意を受け、以後ここを合宿所として使わせてもらうことになった。同氏は、昭和37年の悲しい遭難の当事者小島信浩の父君である。〈早風〉が苦闘した相模湾を一望に収める位置にある三戸浜に建てられたこの合宿所は、若者を育て鍛える絶好の場所であった。この場所は京浜急行の快速化に伴い、次第に便利な土地になってゆく。昭和46年、慶応もこの隣接地に 370 坪の土地を得て合宿所を建設し、再び早慶両校が並んで訓練することになった。昭和47年からは、ここ三戸浜沖で早慶戦が行なわれる。

昭和47年 5 月、〈早風〉を偲ぶ碑が建てられた。

大理石で〈早風〉の帆を形どった美しい記念碑である。設計は東大ヨット部OB：山田水城による。5月13日、鎌倉建長寺管長：湊素堂老師の読経を賜わり、関係者全員の焼香と献花が行なわれた。遭難部員の遺族を囲み、美しい相模灘と富士の高嶺を望んで亡き友の冥福を祈り、かつ、今後のヨット部活動の安全を誓ったのである。

三戸浜の南に油壺がある。〈稲龍〉はクルージングに出発する時、いつも三戸浜沖に姿を現わす。霧笛を長く鳴らして出帆してゆく。合宿所の若者たちは浜に整列して“都の西北”を高らかに歌うのである。三戸浜は美しい砂浜を残している。ここで以後の早稲田ヨットマンが続々と育っている。早稲田大学百年記念の映画が作られた。その中に小島合宿所での学生たちが美しく撮影されている。最も詩的なシーンであった。

昭和44年西宮で全国優勝を果たした小島合宿所第1期生北島武夫主将は、帰京するや直ちに成城の小島家に優勝の報告に赴いた。北島の心は、加藤監督の父の心、小島さんの母の心に感謝の念でいっぱいだった。彼の栄光の思い出は常に美しい相模湾の光景と二重写しである。(続く)

年 業	氏 名 (敬称略)
昭22年	清水 木村 横田
23年	
24年	
25年	
26年	渡辺 漆原
27年	木本
28年	河村 村瀬 石井 円谷 天神
29年	安藤 米田晴 石川 金沢 米田秀
30年	松本 是枝 遊佐 浜田 高島 岩本 千葉
31年	舟岡 佐藤 日色 伊藤
32年	天神 中田 武村 山崎
33年	清水 加藤
34年	岡村 山品 大河内 泉 並本
35年	菅山
36年	原田 吉田 土肥
37年	原田 石田 小沢 伊藤
38年	木村 安藤 土居 山崎
39年	
40年	山中 大 小嶋 守屋

年 業	氏 名 (敬称略)
和41年	滝 頼 小浜 森 小坂
42年	岡戸
43年	
44年	高須 山内
45年	北島
46年	斑目 武藤 菊地
47年	
48年	杉井 中川
49年	
50年	
51年	
52年	角田 川瀬
53年	渡辺 野口 斉田
54年	
55年	坂爪
56年	川上 中島
57年	埴 長瀬 小池
58年	鎌田
59年	黒田 小田 坂東

(以上100名, 204万円)

青春の記録 五十年の航跡

— 終 戦 — (本文124頁より抜粋)

九州鹿児島湾には菊川誠一がいた。海軍でカタール訓練をしつつ上空のB29をにらんで張り切っていた。指宿の護南兵団には木村一雄が、唐津の前原海軍守備隊には野木良一が、九州の南と北で本土の守りについてた。

浜松には小沢信三郎がいた。高射砲陣地に配属されていたが、当時のB29は日本の高射砲の射程をはるかに超えた高空を飛来してきた為、むしろ“砲弾を射つな”の命令さえ出していたのである。湘南の藤沢には海軍の諸施設があった。そこで犬伏一郎と林弘の出あいがあった。

だれもが来るべきアメリカ軍の上陸を予想し、目前の決戦に備えていた。

小笠原群島の父島では、坪田善男が海軍陸戦隊を率いて首都東京の表玄関の守りについてた。加藤久直は甲府の守備隊に、横田豊は鹿島灘にいて、米軍迎撃の山砲を東南の海に向けていた。

九十九里浜での迎撃に備えて、多くの若者が芋畑に陣地構築を重ねていた。ここ利根川べりの我孫子には久留島三記男がいた。首都圏に最も近い場所の兵隊であった。

そして、違った空の下で、みんな8月15日のあの同じ青空の日を迎えたのであった。

所有艇、米軍により接収

久留島が部隊のあった千葉県の新井から自宅へ戻ったのが8月末、戦争終結、米軍の日本進駐という混乱の中、日本人皆が敗戦のショックに呆然自失している最中であった。

母校早稲田大学への復学手続きとともに、最も気になる横浜のヨットハーバーに足を向ける。

ハーバー横にある艦装庫に入り、セール、シート、ロープ、マスト、ブーム、ラダ、センクボード等全ての艦装類を確認、更に岡本造船所横に格納してあったA級ディンギー8艇他の久し振りに見る無事な姿を確認し、今後起こり得る状況の予測だにかかぬまま取り敢えず帰路につく。

まず、愛艇ならびにその貴重な艦装類の安全を図ることが第一、それにはやはり身近な処に保管すること、大学の部室（現在の安倍球場の向かい側、相撲道場の傍の細長い木造の小屋が、当時の部室であった）前の空地が最も良策と考えられたが、当時のアととて、そこに移送するトラックの手配もままならず、思案のうちに数日後再び横浜に向かう。

するとどうだろう。岡本造船所からヨットハーバーに至る間の道（野原）には、既に鉄線の柵が設けられ、そこには武装した米軍兵士が行く手をさえぎっていた。もはや艦装庫には行くことが出来ない。幸い艇の保管場所は柵外の岡本造船所横であったが、岡本のおじさんの話によると、周辺のヨットをアメリカ兵がどんどん勝手に持ち去っているとのこと。このままだとすべてのヨットがなくなるだろうという。

岡本さんと相談した対策は、船底に孔をあけ、使用出来ないようにして、その上で次の対策を考えるということだった。2人でディンギーにかぶせてあった漕を取り払い、1艇ずつその船底に、ドリルで孔をあけていった。全く無念の気持であった。(続く)

「50年の航跡」刊行・ご寄付入金状況 8/21現在

本業	氏名 (敬称略)	本業	氏名 (敬称略)
昭8年		昭16年	堀 中塚 西原 堀江
10年		17年	岩崎 大井
12年		18年	田窪
13年		19年	
14年	増井 新名 山田 阪原	20年	坪田 仲山
15年	永元 長矢 田原	21年	野木

青春の記録 五十年の航跡

—戦時下— (本文98頁～99頁より抜粋)

12月8日太平洋戦争が勃発した。この日、たまたま前日から私の家で仲間達と麻雀をやっている、早朝になって軍艦マーチを奏でた後真珠湾攻撃の第一報がラジオで放送され、米英との戦闘状態に入ったことを知った。私達の運命が大きく変わる日の初まりであった。この日を境に日本の全てが戦争一色となり、新聞は戦争記事に埋められ、ラジオからは威勢のいい軍艦マーチに乗って戦果の発表が次々と流れて来た。国民の戦意はいやが上にも昂揚されていったが、反面物資は極端に不足し生活必需品は日を追って街から姿を消していった。3月初め本牧館でこの年初の合宿が行なわれたが米又は外食券持参ということになった。合宿の終りに対東大戦が有り私達専門部の者は初めて試合に出場することになった。試合前から風が強く、それでもどうにか艦装も終り、外に出て行った。海面は波立ち兎が飛んでいる。セールをワンポイント巻いている船も何ばい見える。私は岩崎と組んで居り天を衝く意気込みであった。時間が近づくに従って風は益々強くなる。フルセールではとても無理になり、オールを出してアクロバットで走る。調子良く走っている内に、急に岩崎が消えてしまった。オールが返って落ちたのである。船は反動であっさりドッキングしてしまった。私達の船が皮切りにあちこちで沈み出し、遂にレースは中止となった。折角初めてのレースもこの様な結果となり、涙を飲んだのである。この時の水の冷たさは、骨身にこたえて忘れられない。

4月18日のことである。私は横浜に居た。比較的温かな日で、午前の練習が終り陸に上がる頃には風は殆ど無くなっていた。持参の握りめしを済ませ、防波堤にもたれて2、3の仲間と一服して

いた。前の海500～600メートル位の処に漁船が帆を立て、のんびりとゆらゆらさせながら何ばいか点在している。本牧の先の沖近く2隻の巡洋艦が錨を下ろして重々しく停泊しているのが遠望される。静かな午後の海の一刻という印象であった。しばらくして巡洋艦の向うの方角から、かすかな爆音が聞こえて来る。いつも聞く音と違い軽い爆音である。怠かれて視ると、20メートル位の高度で1機の中型機が低速でこちらの方に向って来る。

「随分軽い音の飛行機だね…。新型機かな……」

隣りに話しかけながら追っていると巡洋艦の沖側100メートル位の処を通って、本牧辺迄来ると10メートル位の高度に下げ海面すれすれに漁船の居る方向に近付いて来る。胴体に星のマークがはっきりと見える。風防の中の操縦士まで見えている。米機である。漁船の真上を通って鶴見方向にその儘の高度で去って行く。漁船の帆が周章てた様にゆれる。爆音が遠くなる。鶴見の手前から爆撃機は100メートル位の高度にすーっと上がり工場街の上を飛んで行く。ツと工場から何条かの黒煙が上がる。何秒かの後、重苦しい破裂音がにぶく地面をふるわした。日本鋼管が爆撃されたのである。爆撃機は東京方面に消えていった。その時突然上空のあちこちで高射砲の弾幕が散り、その破片が私達の周囲にパラパラと落ちかかって来た。引きちぎれた様な4、5センチの鉄片である。何故敵機が消えた今頃射つのだろうか……。全てが過ぎた後、私は何か白々しく、うそ寒いものが心に重く沈んでいった。

これがアメリカの日本本土初空襲であった。この頃から学生の多くは自分のこれからの命運を判然と予測する様になっていった。(続く)